伊那市官民共創の新しいまちづくり協議会

対話・つながり・実現の場

第６回　開催報告

「可能性２」
多様な学びとは？
～「学びの新しい当たり前」を一緒に考えよう～

2025.10.12

開催報告

テーマ

「可能性２」多様な学びとは？～「学びの新しい当たり前」を一緒に考えよう～

開催概要

〇日時　　：2025年10月12日（日）13:00-16:00
〇開催場所　：伊那市役所　多目的ホール
〇参加者　　：約70人（一般参加：約60人、協議会メンバー・市職員・関係者：約10人

プログラム

1. **学びの新しい当たり前を地域と共に創る！～長野県の教育施策の方向性について～**
   話題提供：松本　順子　氏（長野県教育委員会　教育次長）
2. **「こどもをまんなかとする」これからの官民共創のあるべき方向性について**
   話題提供：竹内　延彦　氏（山ノ内町教育長、信州学び円卓会議委員）
3. **伊那谷ネイチャーセンター構想**
   話題提供：平賀　研也　　（伊那市官民共創の新しいまちづくり協議会ディレクター）
4. **森と学びセンターをつくろう**
   話題提供：山本　風音　　（伊那弥生ケ丘高校将来活用ワーキンググループ、伊那市地域おこし協力隊）
5. **パネルディスカッション　伊那市における「学びの新しい当たり前とは？」**
   パネリスト：松本順子　氏×竹内延彦　氏×平賀研也×山本風音
6. **グループワーク　～「学びの新しい当たり前」のあり方を考えよう～**

学びの新しい当たり前を地域と共に創る！
～長野県の教育施策の方向性について～

話題提供　松本　順子　氏

1　教育や学びのあり方を転換させるとき

・学びの中心に、子どもがいる。一人ひとりの違いを、互いに尊重する。一人ひとりの個性が輝いていく。
・「好き」や「楽しい」、「なぜ」をとことん追求してく。
・子どもが子どもらしく、幸せな子ども時代を謳歌していく。

そして、他者と協働しながら、社会の課題と向き合っていく。新しい社会の創り手を、共に育み、支えていく。

⇒予測不可能で変化の激しい時代である今こそこのような「新しい当たり前」　を共に創っていくことが必要！

2　第４次長野県教育振興基本計画

・目指す姿「個人と社会のウェルビーイングの実現」

3　信州学び円卓会議からのメッセージ

『学びの「新しい当たり前」を共に創る』

⇒このメッセージ発信を受け、
知事・教育長の連名により、学び・教育改革に臨む決意を表明

・学びの未来を共に考える「信州学び円卓会議　ともつくフォーラム」を、令和７年２月に開催

4　令和７年度　長野県教育委員会の取組

・ウェルビーイング実践校「TOCO-TON」など学校の改革を進める。
・教員の処遇改善により、意欲とゆとりを創出
・教員業務の削減・効率化
・地域ぐるみで子どもを育む

5　提案

個人的な考えではあるが、
「伊那弥生が丘高校の跡地が
学び続ける全ての人にとっての学びの拠点に」

引き続き対話を重ね、この場所が、
誰もが学び、誰かを支え、共に育ち合う拠点となりますように！

「こどもをまんなかとする」
これからの官民共創のあるべき方向性について

話題提供　竹内　延彦　氏

〇第４次長野県教育振興計画

・一人ひとりの「好き」や「楽しい」、「なぜ」をとことん追求
・個人と社会のウェルビーイングの実現
・未来をつくる、学びでつくる。

〇学びの「新しい当たり前」を共に創る

・知事と教育長による２人３脚の取組になる。
・支援を受ける受けないなどの垣根を作らない。

・遊ぶように楽しく学びあう
・多様な学びの場を信州全体で支えるネットワークを
　再構築

〇これからの教育

これまでの教育では教える側が多くのメニューを用意していた。
ジェットコースターかメリーゴーラウンドかと選択するだけの、
いわば　「遊園地型の教育 」
↓
これからは、何もない原っぱで自ら遊びのルールをつくり、その
空間に意味を与えるよう導く「原っぱ型の教育」 がとても大事に
なる。　（哲学者　鷲田　清一氏）

⇒子どもたちがイチから作っていくことが大事

〇こどもからおとなへのメッセージ

まず、おとなが幸せにいてください。
おとなが幸せじゃないのに、子どもだけ幸せにはなれません。
おとなが幸せでないと、子どもに虐待とか体罰がおきます。
条例に、“子どもは愛情を持って育まれる”とありますが、
まず、家庭や学校、地域の中で、
おとなが幸せでいて欲しいのです。
子どもはそういう中で、安心して生きることができます。
（認定NPO法人フリースペースたまりば理事長　西野博之氏）

⇒何より大切なのは安心

〇一人ひとりが未来の作り手

未来は
ひとりひとりの
手作りの希望からしか
生まれない。（谷川俊太郎）

話題提供

話題提供　平賀　研也　「伊那谷ネイチャーセンター（仮）構想」

・建物を作るわけではなく、生涯学習を支える機能、学校教育を支える機能、野外教育を支える機能を持った仕組みを作る。

・この地域の資産（共通の情報、価値観）を自分たちで作り、共有していく。

・生活、探究活動などの教科や、ICT教育の支援を行う。

・大学のフィールドワークのサポートなどを行う。

・仕組みを作り、伊那市だけでなく、上伊那、伊那谷に広げていきたい。

話題提供　山本　風音　「森と学びセンターをつくろう」

・地域おこし協力隊として、「森と学び」に取り組んでいる。

・森と学びセンターとは、北欧にある自然学校をモデルにした学校。
自治体の予算で運営されており、自治体の教育システムに組み込まれている。

・学校の教科と結びついた野外活動を行っている。（国語や算数を森の中で行う。）

・教室での学びと異なり、自分の感覚を通して実物に触れ、遊びながら学ぶことができる。

・「正しい知識」を授けられるのではなく、体験を通して自ら知識を構成する＝生きた学び

パネルディスカッション

・この地域で行われた教育をどう発展させていくか
・学びの多様性
・社会の多様さ
などについて意見が交わされました。

参加者からパネリストへの質問もありました。

グループワーク

〇弥生WGメンバーが話題を提供し、そのテーマで話したい人を募るという方法でグループワークを実施

テーマ
・大学を誘致したい！
・公園を作りたい！
・大人の幸せについて考えたい！
・ネイチャーセンターの仕組みづくり
・森と学びセンターを作りたい！
・行政の立場で柴課長と一緒に話そう
・若者が考える伊那新校・弥生ヶ丘の将来活用

〇大学を誘致したい（平賀裕子さん）

・具体的に大学のゼミに使って頂くためには何が必要か？というテーマで話し合いました。
・様々な意見が出る中で、結論としては、「本当の学びを提供する場であり続けること」に至りました。本当の学びとは、誰かに与えられるものではなく、個々人が自分の中にある興味に気づくきっかけがあり、それを思いっきり深めていくこと。そのような環境は大学のゼミのためだけではなく、この場のあるべき姿ではないでしょうか？
・そのような場であり続けるためには、具体的に何が必要なのかを引き続き探りたいです。

グループワーク

〇公園を作りたい

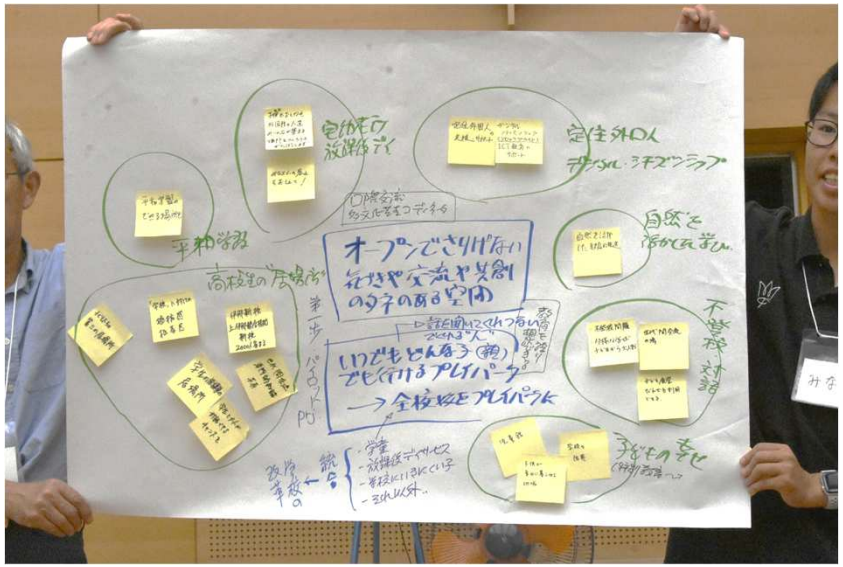
・このグループに参加された皆さんは、「公園はもっと多様な可能性があるのではないか」と感じていて、弥生ケ丘高校跡地を「多様な人々が集う場」とする為に、「公園をつくろう」というキーワードが気になったという方々でした。
・また、弥生が丘高校校庭には歴史、想い、誇りが詰まっていて、それらを尊重した公園にしたいという方もいて、それはとても大切なことだと感じました。
・話し合いの中で様々な意見が出ましたが、もし弥生ケ丘高校跡地内に「面白い公園」が出来れば、多様な世代の人達が自然に訪れ、一人でもボーッと過ごせたり、家族や友人と気軽に休日を過ごせる貴重な場所になったり、子供が身近な自然を感じ触れられる貴重な場になるのでは、という意見が共通していたように思います。
・また、最近Hyde park（London）に行ったが、居るだけでとても気分が良くなり、都市の財産と感じたので、そのような空間が伊那にもあると良い、というお話もありました。
・これからの学びやウェルビーイングのために「公園の多様な可能性」を考えるとても良い機会になったと感じました。

〇大人の幸せについて考えたい！

・大人の幸せが子供の幸せの土台という竹内さんのお話に心が動いた人が集まるチームになりました。
・不登校のお子さんを持つお母さんや福祉に関わる役所の方、など色々な立場や経験も持っている皆さんでしたが、そのことは横に置いておいて、フラットに話が出来たことがとても良かったと思います。
・大人の幸せについては、どんな大人にも地域の子（程よい距離感）と関わりがあって、そういう時間は大人にとってこそ幸せ（充実）であると感じられる。幸せは変化するので、一人が背負うのではなく、多様な関わり方が出来るような柔軟さ、寛容な社会も合わせて大事。その子なりの時間の流れに沿うことも大事。例えば心の断捨離、心の余白ができる場所！？と言ったお話もありました。
・皆さんの子供たちを大事にしたい気持ちの表れた意見が多かったことが印象的です。

グループワーク

○ネイチャーセンターの仕組みづくり



○森と学びセンターを作りたい

・このグループでは、子どもの「遊びと学び」に関心のある方々が集まり、「森と学び」の考え方やポイント、そしてそれらを踏まえてどのような場づくりを進めていったらいいか話し合いました。
・地域の自然環境を活かして、日常的な遊びや体験の中から子どもたち一人ひとりの学びにつなげていくために、学校と地域との連携を図りながら、一緒に学びをつくっていくことが大切だという話がありました。
・学校に限らず「学び」というキーワードを広く捉え、放課後、課外学習、子どもや若者の居場所、大人の学びや生涯学習など、多様な人が集まり共に学び合う「地域の学び場」が必要だという意見が出ました。
・森や自然と触れ合い、体験することを通して、地域の自然や環境を気に掛ける意識が育まれるのではないか。そして自然へのケアを通して、自らもケアされ、「自分自身でいられる」居場所が生まれてくるのではないか。そんな森と人との関係づくりを育める場所が、地域の中に必要なんだとグループで話し合いました。

グループワーク

〇行政の立場で柴課長と一緒に話そう

「伊那市で 大人も子ども 健やかに生きるには！」
・今回のテーマ「子どもをまんなかに 学びの新しい当たり前」を実現するにはどうしたらよいか？
・新しい当たり前と合わせ、古い当たり前を検証する必要がある。昔の教えの悪いところは教訓にし、良いところもあるはずなので上手く重ねていければ。
・新しい当たり前では、子どもの権利条例の趣旨にもある様に「個性」「多様性」を尊重するが、他方で「協調性」「社会的コミュニケーション」と、どう摺り合わせていくか。
・今年のＨＬＡＢに参加したが、外国の方との異文化交流や同世代の仲間とのコミュニケーションが新鮮だった。
・「子どもの幸せ」と同様に「大人の幸せ」も大切。自分らしく生きるには、社会学、当事者学など関連の学びがある。
・不登校の子供が通う「子どもの居場所」と学校との連携が必須であるが、先生は総じて忙しい。連携は少しずつ進歩しているが、「官民共創」の考え方がもっと浸透すると良い。
・行政にはお金がない。弥生の将来活用については、将来を見据えた施策を民間の力をお借りして実施していくことが必要。
・弥生ケ丘高校の建物敷地が、様々な居場所の拠点の場となればよい。

〇若者が考える伊那新校・弥生ヶ丘の将来活用

・広島県尾道市には「ユースセンターオノミチ」という施設がある。町にいるいろんな人（ユースワーク・リスク講習などの研修を受けた人…質の担保）と学びたい人を結びつけるセンター
地域とのつながりを作るきっかけの場
居場所となる　活躍の場となる　プロと出会える場となる

・高校生の立場としては、自習室がほしい、大人と話せる場所が欲しい。ただ、伊那市駅から近いようで遠い　伊那新校から弥生が丘跡地まで行く路線バスとかあるといい。

・大学生の立場としては、若い人が集まる場所として若い人にとって魅力がある場所（例えばライブハウスやクラブ）
受験勉強も大事だけど、社会を学ぶことも必要、いろんな大人から学ぶことも大切。

・おとなの立場としては、学びの直しの場、大人になってからも学べる場、ヒトとヒト　モノとモノ　マッチングできる場　ハブ機能
遊び　↔　ワクワク　↔　学び　のできる場

（参加者アンケートから）

（話題提供）について

・第４期長野県教育振興計画について、深く理解する機会となった。今後の学びウェルビーイングにつながり、学びと遊びを区別しない一人一人が生き生きとできる場としていくことを確認できた。
・県の方向性も伊那市とあっていて、あとは具体的に「大きく変えていく」のが重要かと思いました。
・森と密接な伊那のこれからについて知れて、とても良かったと思います。
・やんちゃな子どもに対しての理解や対策について不十分だと思った。本当に子どもをメインに考えているのか、本当は大人が思う子どものあるべき姿を落とし込もうとしているように感じた。
・今でも大人の知らないところで起こっていることに対しての対策を聴きたかった。
・今の学校制度に限界を感じていますが、地域のリソースをフル活用したソフトパワーの動きに希望を感じた。
・こういう計画が“いい感じ”に現実化して、未来の伊那が楽しみです。
・「こどもをまんなかとする」と言えども、子どもはできることも知らないので、大人に先導してもらいたいと考えた。
・今まで知っていた教育の分野ではなかったので、有意義に感じた。
・松本次長、竹内さんのお話は大変すばらしいもので、その通りだと思いました。県がこのような姿勢でいること、打ち出してくださっていることに大変心強い思いでした。ただ、学校現場の教員の皆さんにどれだけ伝わっているか、実践につながっているのか疑問です。
・県の施策として、多様性、立体性が現場にも浸透していると感じる。
・森と人の多様性が多くの人に伝わると良い。
・今後も応援し、自分としても関わっていきます。
・遊びと学びの境界線の話がとても勉強になった。
・大義名分は立派ですが、心が欠けているように感じます。
・誰もが当事者意識をもつことができるようにすることが必要であるし、各学校や公共施設をつなぐハブのような、人や物、交流や対話が集まってくるよう場所があったらいいなと思った。
・行政にまかせると時間がかかる、変更ができないなど、自由に動けない。地域、民間、企業の力が大事。
・「大人が幸せである」など、いくつか印象に残るフレーズがあり勉強になりました。

（参加者アンケートから）

（パネルディスカッション）について

・参加者のお話が意外で面白かったです。
・学びにおいて「楽しさ」「好き」はとても大切なことなので、ぜひ取り入れてもらいたいです。
・今の大人の考えを学べた。
・「子ども」とは何歳頃のことを指しているのか、一番最初に共有してほしかった。
・理念や考え方に共感し、希望はありますが、それを現実のものとするための手段や方法に発展していくといいと思った。（学校の先生は学習指導要領にしばられている。）
・学びを受ける身として、自分は学びを重要ではあるが、本当に欲しいものは学べていないと考えていたので、興味深い内容だった。
・営利と非営利の違いの話はとても興味深かった。
・地域に色んな取り組みをしている人がたくさんいるんだという知ることができた。
・こどもだけでなく「生きづらさ」を感じている人が様々な世代にいて、この環境をどうしていくのがいいのか、皆で考えていく必要を感じた。
・立派ですが、具体例が欲しい。
・厳しい変化しつづけている世界を生き抜くための力を学校だけではなくて、「社会」で学び続けていく中で得ていくことが印象に残った。
・教育とは「人を創る」ことと思う。子ども自体が考える力、生き抜く力などなど生活をしていく力をつけたい。自然に触れたら解決するわけではないし、少人数学級なら解決するわけでもない。
・学びは遊びからできるものというのが自身の幼少期とリンクして共感した。
・「新しい当たり前」で学んだ若者を受け入れる、社会や大人の変化が必要だと感じた。
・誰もが一緒に学ぶ「インクルーシブ教育」の方向に向かって、教育現場が変化していくと思うが、重度の障害児も含めて考えているのか今後の方向を見ていきたい。
・内容としてはわかったが、それをどう現実に落とし込んでいくのか、家庭内の個人の学びや教育にどう生かしていくか考えるきっかけになった。
・多様性を認めるというのがキーワードかもしれないが、子どもにそれを期待するよりも、社会、世間が寛容になることが大事かと感じました。

（参加者アンケートから）

（グループワーク）について

・真の課題は何か、受益者は誰かという問いに視野を広げ、深めることができた。
・「大学の学び」が求められる真の学びであること、その場を多様な人々とのつながり創っていくことを目標とすることができました。
・色んな立場の方たちの話の中で、ヒントをいただきました。
・自分が特にアイディアがなく来たので、いろいろな意見が聞けて、まとめていただいて面白かったです。
・経験豊富な方たちの話が聞けて、非常に有効な学びになりました。
・自由に語り合えてよかった。
・（どれにも興味があり）テーマが選びにくかった。
・話題提供、パネルディスカッションをとおして、子どもには多くの体験が必要だと考えたので、そこを中心にして話を考えるのが楽しかった。
・新校の話題は伊那北が多かったが、弥生に関することも話せて新鮮だった。
・高校生のグループワークに参加しましたが、本当に素晴らしかった。とても考えて提案もしてくれました。こんなに考える高校生もいるのだなと感心しました。
・テーマが「学び」でしたので、グループワークではもっと「学び」にしぼったテーマのグループワークになればよかったと思います。（子どもの学び場として、子どもをまんなかとした場合の弥生の活用は！？など）
・「大人の幸せについて」「子どもまんなか社会で」どちらも幸せになるために変わるコト大事
・大人が森に関わる機会、学校ごと学びに来る場所になると、先生（学校）にとってもメリットがあると思います。また、市民や多様な方の受け皿に森があることは素晴らしいと思います。
・公園づくりの視点について、考えられてよかった。なぜ居心地が良いのかを掘り下げることの大切さを学んだ。
・高校生の気持ちを聴けてよかった。
・「大人の幸せ」をテーマに議論したが、子育て世代の悩みやそれをきいた世代の我々ができることを考えるいい機会になった。
・弥生ヶ丘高校の跡地に、伊那市教育委員会、県の出先機関（南信教育事務所）を移し、上伊那の教育の拠点にしてはどうか。
・多様性の時代が面白いです。
・誰もが来ることができて、いつでも来れて、来た人その場で出会った人たちとのかかわりや対話をすることができるようなところがあったら、居場所がなかなかなくて困っている人だったりふらっと行きたいときに行けるような感じのところがあればと思った。
・弥生ケ丘高校の跡地も、今日のようなOPENな場を作れると良いと思った。
・大人の幸せという答えのないテーマでしたが、多様な世代の方々から意見が聞けて参考になりました。「余裕と少しの我慢と、それを持つための世間の寛容さ」が刺さったキーワードでした。
・教育の話をすると、問題・課題とか暗い話が多いのですが、今回はそれだけでなく、未来の話も含まれていたのが良かったです。

（運営メンバーから）

■伊那弥生ヶ丘高校将来活用ワーキンググループ

〇リーダー　平賀　裕子

・今回は長野県として時間をかけた丁寧な議論の結果得られた「学びの新しい当たり前」を当事者のお二人から直接、具体的に聞けて、弥生が丘高校の将来あるべき姿がより明確になりました。
・それを受けて、たとえば「ひとりひとりの興味をとことん追求するためには具体的にどんな仕組みやどんな場があったらいいのか？」をブレスト的に考えたいと思いました。
・また、伊那市の構想である「屋根のない博物館構想」やネイチャーセンターは、大変フィットする考え方だとも思いました。具体的な形を描きたい気持ちがフツフツと沸いてくるような1日となりました。

〇山本　風音

・松本さん竹内さんの話を聞き、教育や学びを考える上で「子どもをまんなかに置く」とはどういうことか、あらためて考えさせられました。「子どものために」と言いながら、ともすると学びが「テストのため」「進路のため」「大人のため」のものになっていないか。それを大人が率先して子どもに押し付けてはいないかと、問われているようでもありました。
・学びの新しい当たり前として、あらためて子どもをまんなかに置き、子どもたち一人ひとりが何に関心を持ち、どんなことを学びたがっているのか。そうした「自分自身のための学び」を促し、地域全体でサポートしていくためには、どのような関わりや場づくりが必要なのか。それがひいては、学校内の学習に限らず、学外のインフォーマルな学びの場、自然環境や暮らしに学ぶ場、多様な人々にとっての生涯学習と体験の場など、地域全体の学びについてながっていくのではないかと思います。そうした全体像を見据えながら、地域の人たちと一緒に学びの場づくりを実践していきたいと思いました。

〇須永　理葉

・長野県が掲げる「学びの新しい当たり前」について松本さん竹内さんのお話が参加者の皆さんに届いていることを感じました。また、山本さん平賀さんのお話は伊那市での展開も含んだお話しで、これから具体化して実行していくことがまちづくりそのものだと感じています。個人としては、子供のいる場所が遊び場になる、ひいては学び（遊び）の場になるというお話しが、これからの場を考えるヒントになりそうです。子供が居たくなる場所、安心して居られる工夫を弥生ケ丘高校の跡地で考えてみたいと思いました。

〇吉岡　秀幸

・松本さんのお話の中で、「これまでの教育は大人の都合を子供に押し付けていなかったか？」という問いがまず大切であり、「その上で新しい学びの当たり前を考えていく」というお話しにとても共感しました。そして竹内さんのお話の「学びと遊びは同列にある」という事と、「大人が幸せでないと子供は幸せになれない」というお話に強く共感しました。それは、多くの大人に「自分自身を生き抜いている人」がどれだけいるか、その問いを自分を含めた大人がしてみる事が大切とも思いました。
・山本さんの「森と学びセンター」構想は、学校のカリキュラムと結びつき、「概念と体験が結びつく学び」という考え方に、個人的にも強く共感しました。そして平賀さんの「伊那谷ネイチャーセンター」構想は、そうした様々な活動や人々を結び付ける「ハブ」として機能する事で、新しい学びを実装していけるのではないかと感じました。

（運営メンバーから）

■伊那弥生ヶ丘高校将来活用ワーキンググループ

〇伊那市教育委員会学校教育課長　唐澤　利幸

・学びの多様化、個別最適な学び、誰ひとり取り残さない学びの保障など、県教育委員会や山之内町教育長の考え方と伊那市の方向性に大きな違いはなく、伊那市がモデルになるものもあると感じました。

・弥生が丘高校跡地の活用に関しては、それぞれの考えがあり多様な期待が寄せられていますが、総じて「人と人がつながること」がキーワードかなと思います。裏返して言えば「地域や人とのつながり」の希薄さが、知らず知らずにそこにできているのだと感じます。自分の住む地域に自発的に関心を持てるような仕組みは、なんでしょうか…

〇伊那市商工振興課長　柴　正人

・５人でのグループワークでしたが、高校生、企業人、行政、福祉、移住者のみなさんから、様々なご提言や感想をいただき、相互に有意義な意見交換ができました。

・具体的に弥生の将来活用案に落とし込むまでには至りませんでしたが、本日のテーマ「学びの新しい当たり前」について、それぞれのお立場で、今後の学びの在り方について深堀りができたのではと感じました。

弥生ケ丘高校の将来活用と
まちづくり
森といきる
伊那市

伊那新校、上伊那総合技術新校の開校を契機に、
多様な皆さんとこれからの伊那市のまちを共に考えて創っていきたいという想いで「新しいまちづくり」が始まりました。

伊那市官民共創の新しいまちづくり協議会

対話・つながり・実現の場

誰かがやってくれるまちづくりに意見する、ではなく、自分がつくる、取り組む人と共にある。
そんな、つながり、対話し、実現する場をどうしたらできるだろうか。

これからは、想いのある皆さんと共に考え、試行錯誤しながら共創の場をつくっていければと思います。

いつでも、思い立った時に、ふらりと参加でき、まちのこと暮らしのことを気軽に話せる場。
もっと知りたい、もっとやりたい、やってみようが生まれる場。
そんな新しくゆるいコミュニティが生まれる場。

そんな、いつでもそこにある場に育てていきましょう。